

目次			
第16回大会関連	P1	I I S参加記	P10
第16回大会参加記	P4	在外会員通信	P12
研究会報告	P6	国際シンポジウム案内	P13
第25回総会報告	P7		
2004年度冬季研究集会お知らせ	P7	事務局からのお知らせ	P16
理事会報告	P8	編集後記	P16
I I Sセッション報告関連	P8		

■第16回大会関連

日中社会学会大会第16回大会を終えて

中村則弘(第16回大会実行委員長・愛媛大学)

日中社会学会第16回大会が、6月5日、6日と愛媛大学工学部講義棟で開かれ、約60人が参加した。なお、工学部講義棟を会場としたのは、法文学部棟が夜間主コース講義のために使用できなかったからである。

第1日目は特別報告と書評セッション、第2日目は一般自由報告とシンポジウムが行われた。これらの具体的な内容とコメントについては別稿に譲ることとし、全体の印象のみ記すこととしたい。

特別報告は伊地知紀子氏と高橋基泰氏によって、それぞれテーマとしている韓国・濟州島の民俗誌とイギリス農村家系の研究を通じて、中国社会の位置づけが試みられた。フロアからの質問は尽きず、報告者とフロアの間での真摯かつ活発な応答には、ある種の爽快さすら覚えた。これは、報告テーマとの関連における会員側の関心触発があったとともに、一次データをふまえた中堅研究者の大胆な報告であったからと思える。また、地域や手法をクロスさせた研究方向の可能性を確認した印象をもった。

書評セッションでは、首藤会員の『中国の人治社会』が取り上げられ、こちらも反響に

は極めて大なるものがあったとみうけられた。書評セッションについては、議論の俎上にあげられる作品とコメンテーターが大事だという、当たり前のようなことがらを改めて確認した気がしている。

一般自由報告は4人の会員によって行われた。量的には、いささか寂しい観があった。しかし、報告内容は本学会の持ち味が十分に現れた、興味深い内容のものがほとんどであった。惜しむらくは、フロアとの質疑応答の時間がもっと欲しかった。

午後からは、「現代中国の生活変動 Part I」をテーマにシンポジウムが開催された。東会員、富田会員、李会員の報告はともに、いろいろと議論が深まりそうな内容とみられた。ただ、シンポジウムについては、運営事務のために席をはずさねばならなかったことが多かったので、印象を記すことは避けさせていただく。

全体を通じて強く印象に残ったのは、ほとんどの発表者が、自ら集めた第一次データを用いて報告されていたことである。これは本学会のひとつの特徴を明確に示すものと思えて興味深かった。そのほか、いくつかの試みが行われていたが、そのどれもが成功裏に終わっていたことに驚いた。率直に言って、予想外の感すらあった。このことはとりもなおさず、本学会の裾野の広がり、可能性の大きさを示したものに他ならないのではないだろうか。

* 書評セッション

司会：細萱伸子（上智大学）

書評セッションは、首藤明和会員（兵庫教育大学）が2003年に日本経済評論社より上梓された『中国の人治社会』について、永野武（松山大学）会員、南裕子会員（一橋大学）を話題提供者として行われた。首藤会員による内容紹介、両話題提供者によるコメント、首藤会員によるリプライを経て、フロアからの質疑応答と進んだ。セッションでは、両話題提供者の真摯なコメントに導かれて、活発な議論が展開された。

同書は、首藤会員が中国の非規範村において実施したフィールドワークから、「民衆生活ののっぴきならぬ内実を実証的に分析することを通じて、生活経験を分かち合い、国民国家などの近代的カテゴリーにとらわれない道徳的共感の一般化を目指す」した成果である。そのため、当日の質疑も、内実の具体的内容のディテイルに関わるものと、一般化を目指す概念規定—たとえば〈包〉の構造、「后台人」などにまつわるものと大別された。その上で、議論はディテイルと普遍性の関係、たとえば非規範村の具体的構造と〈包〉の構造の安定性、を中心に展開され、社会的現象としての再現可能性など調査成果の一般化にまつわる理論的課題に及び、きわめて充実したものとなった。

* 自由報告

司会：根橋正一（流通経済大学）

自由報告は、2日目（6月6日）9時30分から、4本の報告が行われた。

報告1は、宮内紀靖（瀋陽師範大学）「中国郷村社会における『公』についての考察——林語堂と清水清光と平瀬巳之吉の視点を中心にして」であり、3人の視点が紹介された。早朝にもかかわらず、13名の聴衆があり、いくつかの質問があった。

報告2は、陳瑞娟（広島大学大学院）「計画

経済体制」時の中国における大学生職場配置の実態——理工科大学の分析を中心に」であった。卒業生の職場配置の実態を明らかにすることを目的として、統一職場配置制度の成立過程、高等教育機関の設備形態を説明したのち、卒業生の分析をおこなった。これに対し、フロアからは、研究の意義はどこにあるのか？ 1983年の資料を分析する意味はどこにあるのか？ といった基本的な問いかけがあった。実態説明に終わらない研究の進展が期待される。

後半は2本の家族研究報告で、両者とも充実していた。

報告3は、晨光（神田外語大学）「中国の家族に関する数量的分析——世帯規模と消費構造から見る社会分化の現状」は、都市家族を分析対象として、統計データを用いて、世帯規模、消費パターンと社会分化との関係を明らかにしようとした報告で、聴衆の関心をひいた。24名となっていたフロアの約半数が発言を求め、活発な議論が展開した。都市家族および分層化に関する研究における、数量データが示す明瞭な諸傾向は、今後の研究の展開にも示唆的であった。

報告4は、鈴木未来（大谷大学）「『新しい家族主義の考察——現代中国における親子関係研究に向けて』」であり、近年の家族研究のなかで提案されている「新しい家族主義」の研究の方向について論じた興味深い報告であった。この議論の可能性に関しては、フロアからの議論の質の高さもあって、熱の入った議論が展開された。新たな理論や視点の提案は大胆な構想と着実な実証によって可能になるが、今後そのような研究が進展することが期待される。

自由報告セッションは、聴衆も充実感をもって終了することができた。ひとことつけ加えるとすれば、自由報告は全ての報告希望者に開かれたセッションであるが、それだけ発表者は十分な準備のうえで、緊張感をもった報告となるよう心がけることが、当然の責任であろう。

* シンポジウム「現代中国の生活変動 part I」

司会：坪井健（駒澤大学）

第16回日中社会学会2日目最後のプログラムであるシンポジウム「現代中国の生活変動」は90年代後半の中国の社会変動に焦点を当てて設定された。生活変動を捉える視座は幾重にも設定可能であるが、今回はそのパート1として3つの報告をして頂いた。

第一報告は「現代中国における観光の意義意識変容の鏡として」と題した東美晴会員の報告である。東会員は、経済的に成熟しつつある現代文化を問う一つの切り口として観光に注目した。旅行による人口移動が、近年労働のための移動（出稼ぎ）から消費のための移動（観光）にシフトしていること。旅行人口9億人弱のうち観光・レジャーによる旅行が6割を占めていること。その旅行形態は産業化され移入した都市住民が農山村の自然や歴史的景観を求めて観光する形態が多く、都市住民の日常経験の変容が観光隆盛の要因になっていることなど、現代中国の文化的価値の反映という観点から興味深い事実の報告を頂いた。

第二報告は「中国家族の教育戦略—都市家族と農村家族の比較—」と題する富田和広会員の報告である。富田会員は、この10年来の中国では都市の一家庭あたりの教育投資額が20倍近くに達している事実を指摘しつつ、この10年の経済成長が人材ニーズを高め、教育熱をあおっている現状を指摘。そのために急騰する教育費や教育熱は自殺や殺人などの社会問題を発生させていること。こうした社会環境の変化は、必ずしも家族の教育戦略に変化をもたらしていないという。但し、都市では子ども自身の利益のため、農村では親の老後のための教育投資という違いが見られることなど、中国家庭の教育戦略の生々しい現状を報告した。

第三報告は「中国都市コミュニティにおけるコミュニティ・ビジネスの展望と課題—リーダーシップへの考察

を中心に—」と題した李妍焱会員の報告である。李会員は都市コミュニティ形成に大きな力になっているコミュニティ・ビジネスに注目し、現地取材の写真を見せて紹介し、新しいコミュニティモデル形成の成功要因を分析する。具体的には自治、民主的参加を実現する条件として、理念先行型の社区建設からニーズ先行型の社区建設への転換を主張する。ニーズ先行型運営のカリスマ的リーダーの下で、17の事業を運営する長春市の居民委員会の事例を紹介し、経済力に裏付けられたリーダーシップの重要性を報告した。

佐々木衛会員と過放会員には討論者として、各報告内容の本質的意味を問う鋭いコメントを頂いたが、ここで詳細に紹介するスペースはないので残念ながら省略する。また、司会の不手際もあり会場からの質問に答えるのがやっついで十分討議時間がとれずに終わったことは残念であったが、観光研究の新しい視座、加熱する教育競争の行方、社区建設の夢と現実など、今後検討すべき課題の糸口になったシンポジウムだった。



根橋前会長挨拶



中村実行委員長(新会長)挨拶

* 視察研修報告

愛媛大学(中村則弘筆)

大会終了後の6月7日(月)、視察研修が行なわれた。参加者は12名であった。研修先は宮窪町と大三島町を予定していたが、時間の都合上、後者はキャンセルとなった。

宮窪町フェリー乗り場にて、生谷辰彦氏(宮窪町産業観光課長)、中川和氏(宮窪町教育委員

会学芸員)らと合流し、生谷課長に船頭を務めていただき用意された船で沖合の能島に渡った。途中、同氏より能島の周囲の潮流、水軍城としての立地条件、大陸をも視野においた水軍の活動などについての説明をうけた。島を取り巻く潮流が、急流並みの速さであったことには、参加者一同、驚嘆を隠せなかった。島への上陸後は、水軍の遺跡を見学するとともに、中川学芸員より水軍施設や中国陶器などの出土状況についての説明を受けた。

乗り場帰着後は、村上水軍記念館を見学するとともに、同館にて郷土史家でもある宮窪町税務課長の村上利雄氏によるレクチャーを受けた。同館の収蔵品である出土中国陶器、水軍が朝鮮半島から持ち帰った中国関連の文物などから、日本と中国との海のつながりの深さを実感させられた。また、村上氏からは15C 半ばのものと思われる中国からの渡来人の墓が8基、町内に残されていること、町内友浦地区からは宋銭や元代竜川窯の陶器が出土していること、さらには中国に能島の町とも言える場所があったことなどをお教えたいただいた。

今回の視察研修を通じて、村上水軍の力やそれと中国大陸のつながりはもちろん、海を通じた日本と中国の民間の結びつきの深さを目の当たりにすることができた気がしている。「日本のなかの中国」について、いろんな角度から捉えてゆくことは、これから十分考察に値するだろうというのが、この視察研修から得られた率直な感想であった。

最後に、貴重な話を聞かせていただいた生谷氏、中川氏、村上氏、および研修を快く受け入れ協力していただいた宮窪町役場の方々に、この場を借りて心より厚くお礼を申しあげたい。



実行委員会スタッフの皆さん

■第16回大会参加記

第16回 日中社会学会大会管見

宮崎満(愛媛大学)

全体の講評は別途に示されるようであり、ここでは各報告の印象を記すに留める。本稿はそもそも、当日のメモから自分のためにまとめたものであったことをご了承いただきたい。

【第1日】〔特別講演〕

韓国済州島における生活誌の研究から見る中国社会

(伊地知紀子氏)

イギリス農村における家系の研究からみる中国社会

(高橋基泰氏)

フィールドにおいて韓国とイギリスの違いはあるが、ともに生活誌(史)の研究者であり、その立場からの中国社会的とらえ方が示された。両者ともに四川地方の流氓的民衆や華南一体さらには東南アジアに散開する客家などといった移動する人々に着目していたことが印象に残った。特別講演については、別稿が用意されていると聞き及んでおり、これ以上の言及は避けたい。

〔書評セッション〕

首藤明和『中国の人治社会』日本経済評論社,2003年.

話題提供者：永野武会員、南裕子会員

問題の書は小生も事前に読んだ。1. 意欲的に独自の理論的枠組みを構築したうえで、フィールドワークに基づく豊富すぎるほどの事実を提示しており、迫力と説得力が感じられ、これが最近の実証研究のスタイルなのかと教えられた。2. おこがましい言い方を許してもらえば、あの若さにもかかわらず、いや、若さあればこそかもしれないが、理論的枠組みづくり・理論構築に当たっての修辞力の力強さ、大胆さと、他方におけるストーリーテラーとしての腕前の確かさは驚嘆に値する。それにしても「註」のほうが多量のものではないかと思われる全体構成はどうだろうか。なお、これは話題提供者の永野氏もフィールド

ワークのまとめの難しさという形で間接的だが言及していたように聞き取った。

永野、南の両話題提供者は、それぞれ重要な問題点を指摘されたが、共通して問題とされたのは①「道徳的共感の一般化」という表現、②「包」的構造の諸問題であった。しかし、時間の制約もあってか、内容的には会場で配布された『ソシオロジ』所載になる橋本満氏の書評とそれへの著者のリプライを越えるものではなかったように思える。書評とリプライは後日ともに興味深く読んだが、そしてそれに値する内容であったが、橋本氏においては、かの大物社会学者の名を「費交通」とした校正ミス？が、首藤氏においては「根底にある問題意識は…2年間にわたる中国滞在での雑感から形成された」という表現が気にかかった。雑感に基づいてこれほどのことをやってもらっては困るのである。

【第2日】

〔一般自由報告〕

1. 中国農村社会における「公」についての考察 —林語堂、清水盛光、平瀬巳之助の視点を中心にして—

宮内紀靖会員

林語堂、清水盛光、平瀬巳之助の三者すべてが中国農村において公は極めて限定された形でしか存在しないとしており、私は公より文字の構成からも上位概念であるという指摘、および「公」には単に「私以外」という意味があり「公館」は他人の家という意味であるという指摘は面白かった。ただし、後者は倉石武四郎よるとのことから、きちんと文献にあたって欲しいという心象を持たざるを得なかった。

2. 計画経済体制時の中国における大学卒業生の職場配置の実態 —理工科大学の分析を中心に—

陳瑞娟会員

このような研究を現在の時点で行う意味について質問があった。資料が公表されたのがごく最近であるという答えであった。

3. 中国の家族に関する数量的分析

—世帯規模と消費構造からみる社会分化の現状—

晨光会員

『中国価格及城市居民家族収支調査統計年鑑』所収のデータによる分析であった。本来、論ずべきところまで話が及ばなかったようであった。

4. 「新しい家族主義」の考察

—現代中国における親子関係の分析に向けて—

鈴木未来会員

一人っ子政策下の中国家族のあり方を考える「新しい家族主義」が考察されているが、そのなかで女性の役割が重要視されていたのが興味深かった。これからの研究の展開が楽しみである。ただ、「房」と「族」の関係、「新しい家族主義」の意味するところについて質問にあったが、後者については肝心なところで明確な答えが得られなかったように見えたのが残念だった。

〔シンポジウム：現代中国の生活変動 Part I〕

報告1 現代中国における観光の意味—意識変容の鏡として—

東美晴会員

産業革命・交通革命期イギリスの海浜リゾートから説きおこし現代にいたる観光・レジャーの変容を観光社会学、観光心理学の立場から明らかにしている。J.アーリ/加太訳『観光のまなざし』1995に触発されて、現代中国の観光を考察している。WTO（世界観光機関）は2020年には中国が世界第一の国際観光客受け入れ国になるとの予測を発表しており、観光は中国社会の将来動向に大きな影響を及ぼすものと考えられるので、研究の一層の発展を期待したい。

報告2 中国家族の教育戦略—都市家族と農村—

富田和広会員

子供の学歴をコントロールするものは、都市家族の場合、親の学歴であるというのとはともかく、農村家族の場合、親の収入でも学歴でもなく、婚出かどうか（跡継ぎであるかどうか）によるという立論は面白かった。そう

すると結局、教育投資の受益者は子供ではなく、親ということになる。

報告3 中国都市コミュニティにおける

コミュニティ・ビジネスの展開と課題
—リーダーシップへの考察を中心に— 李妍焱会員

従来型の職場単位の減少により、都市住民の単位人から「社区」人へのやむをえざる移行が進行しているということはわかっていたが、このような形で示されたのは初めてで新鮮であった。とくに、社区の経済が自治組織によって担われている実態を知ることができ、有益であった。発表はよく整理されていたが、一般論と事例研究のどっちつかずのきらいなきにしもあらずという感じだった。

■2004年度第1回研究会開催報告

中村則弘(愛媛大学)

大会に先立って、6月4日(金)、14:00から日中社会学会研究会が愛媛大学法文学部、本部棟中会議室で開催された。報告者は陳捷会員および中村であり、参加者は27名であった。なお、この研究会は、愛媛大学比較経済研究会、同総合政策学会との共同で行なわれた。

陳会員報告「中国農村における社会経済システムの変容」は、中国農村における社会経済システムの再編のあり方を模索することを目的とするものであった。この報告では、中国農村にみられる家父長的管理・血縁関係にもとづく経済組織、村落支配体制などに残存する特定の農民意識そのものが、現状における農村行政管理システムを行き詰まらせていることが明らかにされた。その上での展望として、都市と農村の二元的社会構造が一元的なものに転換し、農村に対する政府管理が緩和する可能性が高いことが指摘された。

中村報告は「台頭する私営企業主と変動する中国社会」であった。この報告では、歴史の転換との関連からその担い手としての私営

企業主の位置づけがなされ、その類型と形成過程、中間組織のあり方において、地域特性と親和的なかかる企業主の生活指針および民衆世界のあり方が決定的な基盤をなしていることが指摘された。そして、民衆生活の復権にもとづく発展の必要性、反骨型的な私営企業主の担い手としての可能性が主張された。

両報告に対しては活発な質疑応答がなされ、討議内容には意義深いものがあつたと思える。ただし、日程の問題もあつて本学会からの参加者がわずか2名にとどまり、それが主として共催相手の研究会・学会の教官・院生との間でなされたことは報告者の一人として残念でならなかった。とはいえ、これからの本学会の研究会について、状況に応じて他の学会や研究会との合同開催を考えることは、十分検討に値する課題であると思われる。

■第25回総会報告

■ 理事会報告

■ IIS 国際社会学会第 36 回大会

日中社会学会主催セッション報告関連

* セッション 28 陳 立行(日本福祉大学)

このセッション(社会改革の中の東アジアにおける社会福祉と社会保障)では袖井先生の急用で出席できないため、先生の変わりとして私が司会を引き受けることになりました。社会福祉分野に踏み込んだばかりの私にとって、大きな不安を抱きながら、頑張るしかないと思いました。

このセッションではもともと 8 本の論文の発表が予定されたが、一年の延期により、いろいろ事情な事情により、結局 6 人の発表となりました。これは議論の時間として少し余裕をいただいた。

会場には約 40 人が参加して、英語、日本語、中国語三ヶ国語を交じって、それぞれの発表に対して、質疑を出された上で貴重な意見と建設的なコメントが多く聞かせていただきました。

発表者と発表の題名は下記のようになっています。

1) 藤村 一美(東京大学大学院 医学系研究科)

Title: A research on the prevalence and the factors associated with Domestic Violence against women in Contemporary Japan

2) 的場 智子(聖路加看護大学看護学部 COE 専門研究員)

Title: A Research of Patients' Groups in Contemporary Japan

3) 秦 兆雄(神戸市外国語大学 中国学科)

Title: Rethinking the changes in Chinese Lineage

4) 大和 礼子(関西大学 社会学部)

Title: Changing Meanings of "Dependence" in Old Age in Postwar Japan

5) 趙 没名(立命館大学)

Title: The education and medical care of pre-school children with disabilities in China. (Japanese)

6) 陳 立行(日本福祉大学情報社会科学部)

Title: Theoretical Discussion on the Development of Diverse Models of Social Welfare for the Elderly in China

■ 日中社会学会 2004 年度冬季研究集会のお知らせ

首藤明和(庶務理事・プロジェクト担当)

昨年度に引き続き、今年度も研究集会を開催致します。日時は、**12月4日(土)**です。会場、共通テーマ、報告者については未定です。詳細にきましては、後日、はがきや学会 HP 等を通じて、お知らせいたします。



*セッション 73 東 美晴(流通経済大学)

East Asian Society and Globalization では7月9日8時半より7本の充実した報告が行われ、予定時間を大幅にオーバーするほどの熱の籠もったディスカッションとなった。以下に参加者の報告内容を簡単に紹介する。

屋葺素子(大阪大学大学院)の「北京における日本のポピュラー音楽:「大型歌会」と「GLAY コンサート」を事例に」はグローバル化の進展の一つの過程を描こうとしたものである。ここでは、日本のポピュラー音楽が北京において実際にどのように受容されたかが、日本側5組、中国側7組の著名歌手を集めた「大型歌会」と、日本におけるものと同様の演出を行った「GLAY コンサート」のメディアにおける評価の比較を通して紹介された。

馮喜良(首都経済貿易大学)の「中国都市社区保証機能の変遷—社区就業保証機能の変化を中心に」では、聞き取り調査によって把握された実態を踏まえ、現在の社区就業の問題点と、今後の対策が検討された。都市化の進展に伴い、旧来の国営企業の失業者に加え、郊外の新たな社区では離農した農民の就職が問題となるなど、失業問題にも新たな側面が発生している。社区就業はこういった状況に対する対応策の一つであり、社区組織そのものへの就業、所轄区域内の企業への就業斡旋、社区ビジネスの企業による住民雇用の場の確保に至るまで、幅広く展開されている。

唐燕霞(島根県立大学)の「全球化背景下的中国社会分層結構的变化」は、改革開放と経済的側面でのグローバル化の進展によりもたらされた社会階層構造の変化を、統計資料を用い明確化するとともに、そこに起因する社会問題について考察しようというものであった。かつての幹部・工人・城镇居民・農民という社会階層構造が、国家によって直接的に管理される体制内と間接的管理の対象とな

る体制外の二元構造となり、これによる具体的は変化として国営企業職員の地位の相対的低下、新興中流層の出現、都市と農村の格差の拡大、貧富の格差の拡大などがもたらされている。

落合恵美子(京都大学)、山根真理(愛知教育大学)他による Childcare Support and Gender Roles in East and Southeast Asian Societies: Evidence From a comparative research project は、中国、タイ、シンガポール、台湾、韓国、日本における都市の中産階級に焦点を当てた比較調査から、ポスト近代化としての「脱主婦化」の道筋について、状況依存的コンテキスト、規範的コンテキストを明確化することによって、複数のあり方を描き出そうという意欲的な実証研究の成果を示した。日本、韓国では女性の就労曲線は、出産子育て期に減少するM字を描く。生産年齢の間も働き続ける中国、タイでは逆U字を、子供が小さいうちは働き、子供が学校に行くようになると離職する台湾、シンガポールでは逆V字を描く。日本・韓国をタイプ3、中国・タイをタイプ1、シンガポール・台湾をタイプ2として、それぞれの具体的な状況の分析が行われた。基本的に、タイプ3とタイプ1・2を分ける要因は制度、親族ネットワーク等の子育てサポートネットワークの存在、経済格差を背景としたドメスティックワーカーの雇用等による。各傾向の詳細な背景として、日本の場合にはサポートネットワークの欠落に加えケアラーとしての母親役割が強調される、シンガポールの場合には独特の教育事情による等が指摘された。

野入直美(琉球大学)の「台湾・沖縄の双方向的な移住と民族問題」は、1920年代から40年代の台湾・から石垣島、石垣島から台湾間の双方向的な移住者を対象とした生活史の綿密なインタビュー調査に基づいた貴重な報告であった。かつての台湾・石垣島は、ともに

「日本」に組み入れられと同時に、「日本文化」に対し劣位なものと位置づけられていた。また、ともに「日本人」に組み入れられると同時に、「日本人」にあらざるものとして蔑視され、排除されてきた。戦前から戦後にかけての社会変動の中での日本・沖縄本島との関係における彼らの同化と差異化の体験、彼らの間での関係のあり方がビビッドに語られた。

鄭暎恵（大妻女子大学）の *Japan can become an attractive society for Asian immigrants? – Gender Identity and Nation-states under the globalization of East Asia* は、21 世紀の日本のあり方に警鐘を鳴らす刺激的な報告であった。すなわち、少子高齢化が進行する 21 世紀の日本においては大量の移民の受け入れが必要となり、実際、日本政府もそれを認めている。これを踏まえ、国籍別の在留外国人カップルの離婚率等の検討から、日本が決して移民にとって望ましい国ではない現状を明らかにした。

筆者、東美晴（流通経済大学）は、「東アジアにおける観光とグローバリゼーションー台湾の日式温泉の事例からー」において、グローバリゼーション下の観光における文化の移動について報告した。

* セッション 74 中村則弘（愛媛大学）

第 36 回世界社会学 (IIS) 大会が 7 月 7 日から 11 日まで北京において開催された。8 日 18 時からの第 74 セッション「Beyond the Orientalism: From East Asian Perspective」では、長谷部弘（東北大学）、山内太（長野短期大学）、高橋基泰（愛媛大学）、倉真一（宮崎公立大学）、栗田英幸（愛媛大学）、中村則弘（愛媛大学）、首藤明和（兵庫教育大学）により、オリエンタリズムとの関連を踏まえつつ、近世日本農村社会の農民と市場取引、日本近世村落社会の土地所有と移動、近世農村家系図の実相解明、外国人という他者のイメージの変

容、フィリピン・サンロケ多目的ダムの開発実態、両義性と多重性からみる東アジア社会の分析視角、家系と婚姻関係からみる中国社会のダイナミズムについての報告が行なわれた。

夕食時に設定されたセッションということもあって、フロアー参加者は多くはなかった。しかし、各報告が問題提起的であり、またある意味で刺激的なセッション・テーマだったこともあり、報告者とフロアー、報告者相互の間で活発な意見交換が交わされた。オリエンタリズム概念の再検討の必要性、開発概念とオリエンタリズムの親和性、自己と他者という区分自体がもつ問題性、民衆生活にみられる両義性のもつ意味、オリエンタリズムをこえる新たな構想のための実証研究の必要性など、その内容には極めて豊穡なものがあった。

このセッションに関しては、報告者一同、東アジアの視点からの問題提起を初歩的ながら世界に問うことがきたように思える。全体総括のなかでは、このところ IIS 大会の報告内容はパターン化が目立ち、問題提起的なものが少なくなってきていると指摘がなされた。この指摘をうけて、スウェーデンで開催される 37 回大会において、研究内容を深め、新たな形で再度世界に問題を問いかけていくことを報告者相互で確認した。

■ IIS 日中社会学会主催セッション参加記 第 36 回世界社会学大会にボランティア参加して 出和暁子（中国社会科学院研究生院社会学系 2002 年級修士生）

第 36 回世界社会学大会（以下、IIS と略称）が、今夏 7 月 7 日～11 日に北京で開催された。本来は、2003 年夏に開かれる予定だったが、SARS の影響を受け、今年に延期になった。会場となった中国社会科学院（以下、CASS と略称）と好苑建国酒店には、世界各国から 616 名、中国国内からは 560 名、合計 1176 名の研究者が集まり、124 に及ぶセッションが 5 日間

にわたって繰り広げられた。今大会は、今までの中で参加者、セッション参加者が最も多く、国別にみれば、アメリカからが 100 名と最多で、次に日本の 96 名、そして、韓国 30 名、イタリア 29 名、香港 25 名などが続く。セッションは、社会学理論、文化と社会、都市・環境とテクノロジー、女性・子供とジェンダー、経済社会学、老人学・人口と移動、社会構造、政治社会学、社会変動、逸脱と矛盾、社会政策、数量社会学に分類された。

私は現在、当会の主催者である CASS の院生として社会学系に在学しているということで、幸運にもボランティアとして当会に参加するチャンスを得ることができた。今回、参加したボランティア数は約 90 名で、女性が 7 割を占めた。CASS 研究生院社会学系からは 17 名が参加し、また、北京大学、中央民族大学、北京科技大学、中国青年政治学院、中華女子学院、清華大学などの他大学からの参加もあった。他大学の学生に話を聞いたところ、応募条件として、大学英語 6 級以上のレベルを有し、社会学の基本的知識を有するものを優先的に採用するという規定があったらしい。そして、CASS で英語による面接が行われ、具体的な仕事のポジションが最終的に決められた。ボランティアに参加した学生の多くは、20 代前半で、大学や大学院での専攻は社会学、とりわけ、社会工作（ソーシャルワーク）を専攻している学生が多かった。

当大会組織については、李培林氏が総合統括を行い、その他 10 の組に分けられていた。詳しくは、接待組、国際登録組、国内登録組、專題論壇組、大会組、新聞宣伝組、志願者組、保衛組、後勤服務組、外聯組がある（その他、組ではないが、諸々の担当者がある）。私が参加した国際登録組では、大会開催の 10 日ほど前から事前にトレーニングが行われた。英語と登録の際のコンピュータ操作、そして、細

かい料金体系などの説明が行われた。担当の先生自身もこのような大規模の大会主催は、初めてのことということで、正直、あまり要領よくスムーズに事が運んでいるとは思えなかったが、そこは大目にみなければいけないのかもしれない。

また、今大会では、二人のシニアボランティアが参加していたことに大きな意義があると思う。中国の高齢者というと、退職後は孫の世話をして、若い夫婦の忙しい生活をサポートする役割を担っているイメージが強いが、この大会に参加した二人の女性ボランティアは、このような典型的なリタイア後の生活をおくことに抵抗を感じている人たちだった。彼女たち二人は、私と同じ国際登録組だったので、よく交流する機会を持つことができた。彼女たちのボランティア活動に対する情熱には非常に敬服させられた。彼女たちの行動を見て私が率直に感じたことは、高齢者と一言に言っても本当に千差万別で、社会的に勝手に決められた枠の中に高齢者像を当てはめてはいけないということだ。二人は、高校の同級生で、一人がインターネットでこのボランティア参加情報を見つけ、友人を誘って応募したと言う。一人は英語、もう一人がフランス語のボランティアとして選ばれた。彼女たちの根本的な考え方に、若い人といっしょに活動をし、そのような環境に浸る感覚が好きだと言うのがある。今大会が終わった後も、彼女らはまた、続々と他のボランティア活動に参加し、リタイア後の生活を自分の知識を向上させるためにエンジョイしたいと意気込んでいた。

それから、ちょっとした内部エピソードだが、大会 2 日目の人民大会堂（残念ながら、全人大が開かれる場所ではなく、入り口からそこに入るまでの空間を使って行われた）で開かれたオープニングセレモニーでは、同時通訳を聞くためのエアホンセット管理に対し、かなりの神経を尖らせていた。聞くところに

よれば、1セット紛失した場合、罰金を払わなければならないが、その値段が2700元とかなりの高額だ。過去に紛失したことがない会議は一度もないらしく、当初、私たち主催者側の目標も数個が紛失しても仕方がないが、とにかく限りなくゼロに近づくようにみんなで協力してがんばろうというものだった。そのために、参加者は人民大会堂のゲートで厳重な検査を経て中に入った後、Congress IDカードをエアホンと引き換えに出し、そのIDカードと本人に手渡したエアホン両方に同じ番号シールを貼って紛失防止を図るという方法を大会組のリーダー（ちなみに私の指導教官）が編み出した。この方法は、参加者には多少の不便を強い、また、ボランティアの仕事の量が若干増えたかもしれないが、最終的には、数個返却されなかったエアホンセットをこのCongress IDカードを頼りに探すことができ、紛失ゼロという新記録を打ち出すことができたのだ。

今大会で、私自身、残念ながらセッションを丹念に聞いて回るということではできなかったが、インフォメーションデスクという場所にいたおかげで、個人的には日頃、出会う機会の少ない日本の研究者の先生方、そして、学生の方と知り合うことができ、また、CASSの先生方、そして、他大学の学生、各国の研究者の方々と交流を持つことができたことは私にとって何よりの収穫で貴重な経験となった。

■ 在外会員通信

私の中国研究活動及び第36回世界社会学会レポート

長田洋司

（早稲田大学院アジア太平洋研究科国際関係学専攻博士後期課程）

私は、現在、早稲田大学大学院アジア太平洋研究科博士後期課程に所属しております、長田洋司と申します。今回、このように日中社会学会学会誌に記事を掲載させていただく

に当たりまして、この機会を利用して、私の現在の中国での研究生活及び、先日、北京で開催されました第36回世界社会学会大会に参加した模様などをご紹介します。また、ご挨拶させていただきます。

私は現在、博士課程において、『中国都市住民の行動様式』を自身の研究テーマとして、ここ数年活動が活発化している中国都市社区建設の現状及び、その中で実際に生活している住民たちのコミュニティ帰属感や住民同士のコミュニケーションの実態について、北京をフィールドとして、実地調査と歴史的な視点を組み合わせて検証しようと、研究活動を進めています。

私は今年の3月から中国に滞在しているのですが、6月までの3ヶ月間は、霞山会による研究生の短期派遣により、上海で、そして6月から現在までは、自主的に北京にて活動しております。上海での滞在期間中は、上海交通大学に籍を置いていただき、快適な環境の下、上海図書館を中心として資料収集等の活動をさせていただきました。上海は、私の研究テーマである社区建設については、中国国内でも比較的発達しており、実際に街の様子、人々の生活ぶりを肌で体験できたということが、何よりの経験となりました。また、中国社区の研究が活発な復旦大学社会学系の先生とも連絡を取らせていただき、上海及び中国の社区建設の現状について、親切なご指導を頂いたことも、大きな収穫でした。

次に北京では、北京師範大学歴史系の楊寧一教授にお世話になりながら、私の研究テーマに伴う実地調査のための準備を進めています。北京での社会学研究の状況としましては、人民大学や北京大学、清華大学などで活発な活動をしており、社区研究においても多くの研究成果が出されているのですが、しかし、中国の社会学研究においては、中国社会科学院の存在と影響力を決して無視することはで

きません。中国社会科学院は、北京の中心部である天安門広場から見ると東方に大きな専用のビルが聳え立っており、分野別に研究室が設置され、院生の育成や、機関紙の発行といった活動も行っています。そして、様々な興味関心を持った研究者や院生が、情報交換をしながら自主的に研究を進められるという点では、最適の研究環境を誇っているという印象を受けました。

以上、私の中国での研究活動等の簡単な紹介をさせていただいたのですが、続いて、先日、北京で開催された第36回世界社会学会大会に参加した際の模様を紹介させていただきたいと思います。

この大会は、7月7日から11日までの日程で、北京の好苑建国酒店(Jianguo Garden Hotel)をメイン会場として、先に述べた中国社会科学院の主催によって開催されました。大会では、セッション毎に世界各国から多くの研究者が集まり、自身の研究成果を報告するという形式で行われ、今回の開催地が北京であるということから、日本からも多くの研究者が集まっていました。

またこの大会では、日中社会学会主催のセッションも3つ設置されており、それぞれのメインテーマは、“Social Welfare and Social Security under the Social Transformation in East Asia” “Beyond the Orientalism: From East Asian Perspective”、そして “East Asian Society and Globalization”となっていました。私はその全てに参加させていただいたのですが、どれも大変興味深い報告と活発な意見が交わされ、良い雰囲気の中で進められていました。また、あるセッションでは、報告者の発表内容や質疑応答の活発さから、予定の終了時間をオーバーしてしまうという一幕もあり、各研究者の興味対象に対する好奇心と積極性が旺盛に

現れ、私自身大変刺激を受けました。大会全体としましては、初日のオープニングセレモニー及び、晩餐会、コンサートを人民大会堂で盛大に開くなど、中国社会科学院の力の入れようを感じさせられると同時に、日本を含め、各国の様々な研究者の方々と交流の機会を多く持てたことは、大変大きな収穫であったと思います。

このように、簡単ではありますが、私の中国での研究活動と世界社会学会大会の模様について、ご紹介させていただきました。特に中国での生活に関しましては、私が2年前に北京に滞在していたときよりも、研究活動においても、スムーズに進めることができるという印象を持っています。今後、日中両国の研究者同士の相互交流が更に活発化することを切に望むと共に、私自身も、この滞在期間を通して、有意義な研究成果を出せるように、がんばっていきたいと思います。

■国際シンポジウム開催案内

袖井孝子理事から寄せられました、国際シンポジウムの開催に関するお知らせをいたします。

「アジアの巨大都市と地球の持続可能性」

(2004年11月10日～12日会場：日本学術会議講堂)

*日程

10日:アジアの巨大都市の実態、
11日:物質とエネルギーの消費、都市環境と健康
12日:人間居住と計画、都市の安全と安心

*講演予定者

ロバート・メイ (英国王立協会会長)
尾身 茂 (WHO西太平洋地域事務局長)
林家彬(中国国務院発展研究センター副部長)
ハンス・ファン・ヒンケル (国連大学学長)

*言語: 英語及び日本語 (同時通訳)

*参加費: 無料

※詳細と申し込みは、

HP (<http://www.interacademycouncil.net>)

をご参照下さい。

編集後記

今号も研究大会やIIS日中社会学会
関連セッションの報告など、記事内容が盛
りだくさんとなりました。紙面構成の都合
上、前号から掲載の包敏先生からのご寄稿
による「中国研究・隣接分野の動向－社会福
祉学」は次号に掲載いたします。ご了承ください。
新会長が選出されるなど、役員体制も
一新。ニューズレターの編集体制も変更が
ありますが引き続き、会員の皆様からのご
寄稿をお待ちしています。（鈴）。

日中社会学会ニューズレター No.42

発行：日中社会学会事務局
〒松山大学
人文学部永野武研究室

e-mail:nagano@cc.matsuyama-u.ac.jp

tel:089-0000-0000（研究室直通）

fax:089-0000-0000（大学事務室）

◎編集担当

鈴木未来(suzuki-m@ss.ritsumeit.ac.jp)

首藤明和(shuto@soc.hyogo-u.ac.jp)

発行日：2004年9月